

南米の赤道直下のコロンビアの首都ボゴタはさぞ暑いのかと思いきや、標高 2640m で 1 年間を通して最低気温が 10℃前後、最高気温は 20℃前後で安定しており、少し拍子抜けしました。おりしも雨季の真っただ中、午後には小一時間スコールになります。

今回、そんなボゴタで開催された世界最大規模の保健医療制度の学会『第 7 回 Global Symposium on Health System Research 2022 (HSR2022)』に参加してきました。というのも、2024 年の『第 8 回 Global Symposium on Health System Research 2024 (HSR2024)』の開催地に長崎が選定されたので、ボゴタから長崎への引継式に参ったということです。数十年に渡り長寿国となっている日本は、1961 年に国民皆保険制度を確立しました。要は、皆さんご存じの SGD でも謳われているユニバーサルヘルスカバレッジと呼ばれる状態を、日本は 60 年以上前に既に達成し、しかも現在に渡り維持しているのです。日本の保健医療制度は、国内的には色々と批判を浴びる場面もあるものの、世界に誇るべきものだと思います。2024 年には、日本の保健医療制度の成果を世界に発信するだけでなく、先進国のみならず開発途上国の保健行政、研究者、WHO 等国際機関や NGO との自由闊達な議論の場を、長崎が提供することになります。

今回のボゴタでの HSR2022 は新型コロナウイルス感染症のパンデミックが収束には至っていない中での開催のため、対面形式、オンライン形式、そしてそれらのハイブリッド形式の 3 タイプのセッションがありました。その結果、参加者数は合計約 1400 人なのですが、実際にボゴタに来た参加者は 1000 人程度だったとのこと。私はこれまで、臨床系の国際学会には数多く参加してきましたが、今回のような保健医療制度の大規模な国際学会に参加するのは初めてで、新鮮に映りました。革新的な医療技術や医薬品が開発されても、電気も水道がなく未舗装道で数百キロ離れた地域に住む人々はそういった新技術・新医薬品にはアクセスできません。そのことは、エボラ出血熱のパンデミックでリベリアに行ったときに、私も実際に体験し痛感しました。当たり前のことですが、改めて人々の健康・生活を豊かにするためには、医療のみならずインフラ・環境・文化といったマルチセクターあるいは多面的なアプローチが必要であることを、今回の学会参加を通して再認識するに至りました。

医療者として、アカデミアである大学の長として、『第 8 回 Health System Research 2024』を出島メッセ長崎で開催する意義を強く感じた 5 日間となりました。